

---

# GOD EATER—神喰いと神—

蒼参

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G O D   E A T E R ― 神喰いと神 ―

### 【Nコード】

N 8 0 0 0 W

### 【作者名】

蒼参

### 【あらすじ】

フェンリル極東支部第一部隊隊長のクザイ。特に何も変わりなくアラガミを倒し過ごしていたクザイは久しぶりの休暇をもらい、市街地に行ってみる。するとそこで『かくれんぼをすると子供が消える』という妙な噂を聞いて……

## プロローグ 不穏な空気とかくれんぼ

序章、奈落の底へ

少年は焦っていた。走っても走っても、後ろから気配が消えることはない。むしろ、近づきつつあるこの状況。

「ああああっ…」

涙で視界がぼやける。少年は奇声を上げること、止まる足を無理矢理動かした。

「……………」

少年の焦りを嘲笑うかのように、気配も叫び声を出す。

「あっ！」

気配が少年の足を捕らえた。そのまま、空中へと放り投げられる少年。

少年が最後に見たものは、大きな口を開けたアラガミの姿だった。少年の体は、アラガミの口へと……………奈落の底へと落ちていく。

不気味なほどの静けさを持つ森の中で、少年はゆっくりと目を開ける。

暗い森の中。二つの真っ赤な光が月明かりを浴び、ピカピカと瞬いていた。

「あー、平和だなあ…」

市街地のある地区。そこは市街地の賑わいの中心点で、色んなお店が並んでいる。その“色んなお店”の一つである喫茶店に俺はいた。

なぜに市街地にいるのか。ゴッドイーターとしての仕事はどうしたのか。

理由は簡単。実は俺、昨日ゴッドイーターをクビになってしまったのだ。ツバキさんやペイラー博士の怒りを買ってしまい首ちょん

ばである。……嘘、冗談。なんだか、本当にありえそうな話になってきたのでここで冗談はやめておこう。

実はゴッドイーターになって初の長期休暇で、久しぶりのお休みだ。

近頃、色々あったからなあ。ま、その色々もリンドウさんが帰ってきてからは徐々におさまりつつある。今のアナグラは昔と比べちゃ平和だ。

いや、アラガミがこの世にまだ存在している時点で平和じゃねえけど。その……雰囲気的に平和なんだ。サクヤさんとリンドウさん、結婚して早々子供が産まれるそうだし。俺の部隊で言えば、サクヤさん以上にアリサが上機嫌だったからな。リツカさんとか他の部隊の女性陣集めて何か企画してるみたいだしさ。俺もまざりたかったんだが、

「男子禁制です。クザイは特に絶対にダメですっ!!」

って言われて……少し寂しかった。俺ってそこまでダメなのかね？

「おう、クザイじゃねえかつ！ 仕事はどうした！ 仕事は！ クビにでもなっちまったか！」

軽くへこんでいると、背中を勢いよく叩かれた。俺は盛大に飲んでいたコーヒーを吹き出す。アイスコーヒーだったから熱くはなかったが。

「いきなり何すんだよ。おっちゃん」

振り返り、俺のズボンに染みをつくる原因となった人物を睨む。

汚れた作業着を着て、頭には油染みの付いたバンダナを巻いている推定50のおっちゃん。名前なんて覚えておらん。数少ない私服を汚したヤツなんて、おっちゃんですら十分だ。

「ガハハハッ！ 相変わらずだなあ、お前は。変わってねえ」

豪快な笑い方をしておっちゃんは俺の隣に腰かけた。

「数か月ぶりだろ？ そんな短期間で俺は変わらないっての」

他の人がどうかは知らんが、自分では自覚ぐらいしている。俺は何一つ変わっちゃいない。内面も外見も含めて。

アリサやソーマとか変わってるのにな。後、コウタも少しは変わったような……気がする。

それに喜ばしいことに、ソーマは皆から結構慕われている。今ではゴッドイーター内でも信頼は大きいし、もう『化け物』なんて呼ぶ奴はいない。

いたらいたで、俺がまとめて殴り飛ばしてやるけどさ。職業柄か実力行使が重視されてるもんで。

「ああ？ 顔つきとか体は逞しいじゃんかよ。どうだ？ ゴッドイータークビになったんなら、ウチで働かねえか？」

だからクビになってないって。話を聞かんか。頭痛を抑えるために、俺はコップの水を口に含む。

「俺は休暇中なんだ。それにクビになったとしても、ラーメン屋に再就職する気はないね」

毎日毎日、蒸し暑いところでラーメンを茹でるなんて俺は嫌だ。それに比べりゃハンニバルを討伐するほうがマシだ。

「なんでえ、ツレねえなあ……俺とお前の仲じゃねえか……」

湿っぽくため息をつき、体を寄せてくるおっちゃんを反対側に突き飛ばす。

「はて？ どちらさん？」

盛大な音をたて、バランスを崩したおっちゃんが椅子から落ちた。むろん、俺は涼しげな顔で残りのアイスコーヒーを飲み干す。

「痛いっ！ まったく近頃のガキは年上を敬わんな。お前んとこのクラナも生意気に成長してるぜ。昔は可愛い子だったんだけどな……」

最近のおっちゃんは立ち直りが早いらしい。倒されてなお、俺に話けてくる。ハンニバル並みのしぶとさだ。

「クラナか。そういや、最近は会いに行っていないな」

明日にでも会いに行くか。会った瞬間飛び蹴りされそうだけどさ。ま、長い間会いに行っていないからそれぐらいは許してやろう。……二発目は許さんが。

「あー、クザイ？ ちいっと頼みてえことがあるんだが」

「内容次第によって聞く」

やれ、やつとまともな話になってきたか。俺はおっちゃんの顔に視線を向ける。

「最近、ここのらの子供がかくれんぼしている最中によくいなくなっちゃうんだ。今月入ってもう：十件ぐらいだったかね？ アラガミが関係してるんじゃないかねかと噂になってやがる」

かくれんぼ中に子供が消える：か。

「後も残さずにか？」

もしこれがアラガミの仕業なんだったら、後を残さずなんてお行儀のいマネはあいつらにやできない。シオは綺麗に食べてたけどさ。

「ああ、後も何もねえんだ。綺麗さっぱりと、昔の神隠しみてえに」

「神って今じゃアラガミ隠しだぞ？ ってか、後も残さねえか」

新種のアラガミか。自分の巢にでも、獲物を丁寧にとって帰ってからとか：そんな頭のいいアラガミなんて想像できねえな。

「ま、とりあえず俺がそのかくれんぼに参加すりゃいいだけか」

「すまねえな。休暇中なのによお」

珍しくおっちゃんに頭をさげられた。何年振りだろうな。このおっちゃんにも申し訳ないって気持ちがあったことに驚きだ。

「今度お札にラーメン奢ってやるっ！ この前の可愛いねーちゃんも連れてきてくれなっ！」

前言撤回。こいつアリサに会いたいだけのスケベだった。

「黙れ、エロおっさん」

俺は冷たく言い放つと、もう一度反対側へ突き飛ばしてやる。アリサのセリフ「ドン引きです」を言わなかっただけでもマシだ。

さて、早速その“かくれんぼ”とやらに参加しに行こうかね。

## プロローグ 不穏な空気とかくれんぼ（後書き）

ゴッドイーター2（仮題）発売決定に便乗して投稿しました。  
駄文ですがよろしく願います。

次回、かくれんぼに参加するクザイはたしてアラガミの仕業なのか…

### ・主人公設定

クザイ（18）

神機、バスターブレード・スナイパー

第一部隊のリーダーをつとめる少年。仲間からの信頼は厚い。

仲間を大事にし、仲間を救うためなら危険も厭わない。明るく結構な天気な性格。

容姿は黒髪黒目の典型的な日本人。

## 第一話 現れた少女（前書き）

長く間が空きましたが、GE二話目です。



## 第一話 現れた少女

「よお、俺もかくれんぼに入れてくれねえか？」

今からかくれんぼをするであろう子供達の集まりに近づいた俺は、できるだけフレンドリーに声をかけた。まあ、背中にでかい神機を背負いながらかくれんぼに参加は、自分でもどうかと思うが。

「兄ちゃんが？ 大人なのにな？」

案の定、変な顔をされた。

「おいおい……かくれんぼに年齢なんて関係ねえよ。何歳だってかくれんぼしていいじゃんか」

変な顔でさっきの疑問を浮かべた少年の頭を撫でつける。

「けどよお、大人じゃん。大人は働くもんだって」

「おお。これもお仕事なんだよな。ってことで、参加オッケー？」

それにしても、現実味を帯びた発言をするなこいつ。最近の子供は全員こんな現実的なんだろうか。

俺が小さかった頃は遊んでばっかだったのによ。

「どうする？」

「別にいいじゃん。人数増えたほうが面白いしさ」

「大人はデカイから、こっちが有利じゃん」

「かくれんぼを仕事なんて言ってるヤツだぜ？ かくれんぼのプロじゃねえの？」

「それって、ただ働き口ないからじゃね？」

「ああっ！ 寂しい大人か」

ここからじゃ、話は丸聞こえだ。誰が寂しい大人か。俺にはちゃんと仲間がいるんだ……

「何か手伝いねえの？ 俺もサクヤさんお祝いしたいんだよ」

「絶対ダメです！ もうっ！ これで何回目ですか？ ドン引きで

す！」

……ありゃ？　こういう時に限って思い出すのが寂しかったことだ。もしや……俺って寂しい大人なのか？

「ドン引きです！」

そう考えるとアリサの口癖って、言われた相手に多大なダメージを与えるよな。俺、このまま第一部隊のリーダーとしてやっていくのか、不安になってきたぞ。

「おい、兄ちゃん？」

「ん……？　あ、ああ。何だ？」

気が付くと少年が、不思議そうに俺を見上げていた。

「いや……今からじゃんけんするからさ。兄ちゃん、入らないのかって」

見ると子供達は、もう円になって準備をしていた。

「入るって」

俺が人知れずダメージを受けている間に、話し合いもすんでしまったのか。子供達が俺を見る目が、どことなく哀れんでるように見えるのは俺の気のせいだよな？

「もういいかい？」

じゃんけんの結果見事負けてしまった俺は、こうして鬼として子供達の「もういいよ」という返事を待っている。

もし、消えるのがアラガミのせいだとしたら、ゴッドイーターである俺が全員を把握しとなくてはならないのでわざと負けのだ。こういうときに動体視力がいいと得するな。いや、負けたから損か。「もういいかい？」

にしても、二十歳前のいい大人がこう「もういいかい？」を連呼している姿は少し滑稽だろう。

「ドン引きです」

いや……さ。さっきから何でアリサばっかなのよ俺？　そんなダメージ受けたいのか？　それにしても、なぜにアリサなんだろう。同

じ新型だから？ まさか感応現象の影響とか。

「アホらし」

自分の考えを全否定してため息をついた。ホント、なんででしような？

「うわああっ！！」

静かな空間に響き渡る声。かくれんぼに似合わない甲高い音。

「っ！！」

悲鳴だ。俺は悲鳴が聞こえた方へ、急いで駆け付ける。悲鳴ってことは、やっぱりアラガミか。だが…なぜアラガミが？ 壁を破って来れるはずない。ここにアラガミなんているわけない。

だが俺のその考えは、あっさりと覆された。

「なっ！！」

その光景に愕然とする。

「……なんで……ヴァジュラが…」

「なんで」を考えるより早く体が動いた。

ヴァジュラが俺に気が付くよりも早く。ヴァジュラが誰かを傷つけるより早く。

「おらああっ！！」

全力で神機をヴァジュラの顔面へと叩きつけた。

グギャアッア！！

攻撃された顔を振るヴァジュラ。俺は暴れる足を次々と切り捨てていく。返り血が俺の服を赤く染め上げた。

「なんでアラガミがいんだよおっ！！」

疑問と苛立ちを力に変えて、俺は神機を振るう。

誰かが言った。「お前らゴッドイーターは神喰いだ」と。「アラガミは神なのだ」と。「お前らは神に背く不屈きモノだ」と。

それなら、と俺は思う。

「その神を殺し尽くせばいいだけだ。ゴッドイーターという者はその為だけに存在するのだから」

ヴァジュラを倒した俺は、急いでうずくまる少年に近づいた。見たところ、傷は見当たらない。

「すまん。かくれんぼさえ満足にできない世界で」

泣きじゃくる少年の頭を撫でながら、俺は呟いた。

子供達を全て帰し終えた後、俺はかくれんぼをしていた場所を念入りに確認する。

アラガミとはいきなり湧いて出てくるわけがない。どこかに隠れているんだ。

俺らがさっきまでやっていたかくれんぼみたいにな。

「ヴァジュラなんて、隠れる場所なんてねえぞ」

何度も見たが、あんな大型アラガミが隠れるような空間はどこにもなかった。なら、あのヴァジュラは何でいたんだ？

「ちくしょう。普段、あんま頭使わねえからなあ」

頭をかくが、それで何か解るわけでもない。というか、逆にこんがらがった気さえする行為だ。

「あ？」

顔を上げて、俺は間拔けな声を出した。好きこのんで間拔けな声をだしたわけじゃない。そんなの、アホみてえじゃないか。

「おい。ここは危ないから帰れて言ったはずだが？」

少女が立っていたのだ。歳は十代半ばぐらい、幼さの残る顔には一切の表情はなく、青い瞳が俺を見ている。

少女は、俺に近づいてきた。俺は近づかれる理由も解らず、ぼん

やりと突っ立ったまま。

「嬢ちゃん。ここは危ないぞ？」

無視して少女は、無表情のままポツリと言呟いた。

その呟きは、小さく、耳を澄まさなければ聞こえないほどだったが、はつきりと俺の耳に届く。

「私はクザイの神機」と。

## 第一話 現れた少女（後書き）

いきなりですが、新キャラの登場です。

アオ

クザイの神機と名乗る少女。

青い瞳と黒い短髪、レンとは違って他のゴッドイーターにも見える。  
無口で無表情。クザイの話しかけにも必要最低限は話さない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8000w/>

---

GOD EATER―神喰いと神―

2011年10月10日03時23分発行